

◀小さな土器片を接合



▶テーパー、接着剤、石こうなどで土器を作っています



◀還元した土器(白い部分は石こう)



④還元 (56・7・12千定)

- ・分類された土器片を接着剤で接合。
- ・土器片がないところやすき間は石こうで埋めます。
- ・早くて三日、難しいものですと一ヶ月かかります。
- ・石こう部分の土器片が見つかったら、そこに再び埋めこみます。

⑤実測 (56・8・12千定)

- ・還元された土器の形、大きさ、高さ、厚さなどを測り、方眼紙に実測図を書きます。

III 報告書作製

①トレース (実測と同時に進行)

- ・実測図を上質紙に正確に複写します。

②撮影 (57・1・3千定)

- ・全ての土器を撮影します。

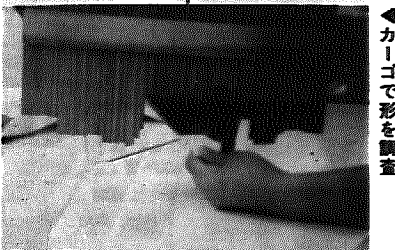
③原稿 (57・1・57・12千定)

- ・自然科学(地質など)、考古学(年代)などの面から考察、研究します。
- ・執筆は、新潟大や高校の先生が担当されます。

④報告書 (58・3千定)

- ・緒立遺跡の全ぼうを明らかにして、一冊の本にまとめます。

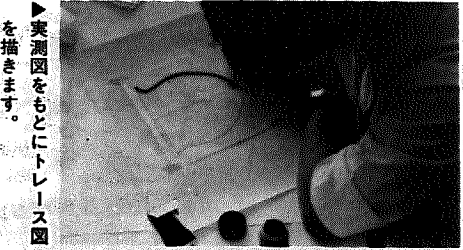
▶カーゴで形を調査



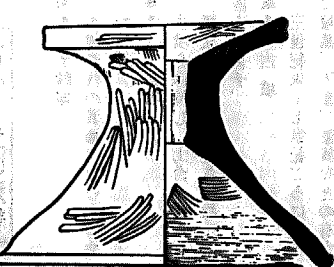
▶キャリパーで厚さを測定



実測図



▶実測図をもとにトレース図を描きます



▶完成したトレース図右が内側、左が表面で黒塗りは厚さです

▶魚拓のようにして模様をとりま



大分県立考古学研究所

現場のぬ声

県文化行政課の村山さん、沼田さんを中心に、毎日、史料館で土器復元作業、調査にあたられているみなさんを紹介いたします。

村山陽子さん

(県文化行政課)

実測図を担当している村山さん。県職員としてこの仕事を担当して三年目、現場は緒立が初めてという。

実測図は一枚どの位かかるんですか。

村山「一日に一枚位です。丁寧にやればもっとかかりますが。」

どこを測るんですか。

村山「高さ、深さ、幅、厚さ、全部です。」

この仕事で一番必要なものは村山「やはり、時間。次にお金ですかね。」

田沢美知枝さん

(県文化行政課)

村山さんの補助として実測図を始めたばかりの田沢さん。とにかく大変みたいです。

一言で言っておもしろいんですか。

田沢「めったにある仕事でないです。からね。おもしろいですよ。」

どういうところが。

田沢「やっぱり、何と云うんですか、二千年も前の土器でしょ。どういふふうに使ったんだろうか。なあ、とか考えたりします。」

そうすると仕事も進む？

田沢「はかどるといいます。たくさんあって忙しいです。」

沼田スズエさん

(県文化行政課)

村山さんと同じく県から派遣されている沼田さん。二人とも八月一杯で県の方に戻りました。

復元作業はバズルみたいですね。

沼田「ええ。でも、破片の接着する角度を間違えると全部合わなくなるんですよ。」

立体的なところが違う？

沼田「そうです。」

今までいくつ作られました？

沼田「五個です。全部で百以上になるみたいです。」

藤波真理子さん

八月からトレースを主に担当されている藤波さん。新潟市から通っているのがかなり不便とか。

トレースの難しさは？

藤波「直線をきれいに引くことです。曲線は何とかなるんですが、コツはあります。」

息を殺して書くのですか。

命がけですね。

藤波(笑い)「まだ始めたばかりですから。今は練習なんです。報告書には載せられませんわ。」

渡辺友和さん

(国学院大史学科三年)

五十四年の発掘から参加し、来年度は緒立遺跡を卒論としてまとめる予定だそうです。

緒立遺跡の特徴は？

渡辺「当時の緒立の自然条件、砂丘と言われていますけど、よくわからないんです。それと年代で

すね。

最も古い年代はいつですか。

渡辺「縄文末期か、弥生初期のどちらかですが、弥生だとしても今のところ稲作の跡は見つかってません。」

八幡宮はどうですか。

渡辺「主体部を発掘してませんが、何とも言えません。内墳みたいですね。」

鷲尾好栄さん

土器の模様を書いている鷲尾さん。少しでも失敗すると描き直さなくてはならないので神経がすり減るとか。

模様というのは全部違うんですか。

鷲尾「もちろん。同じ土器なんて一つありません。みんな手作りですから。」

今でも使える土器はありますか。

鷲尾「それは無理です。水を入れたら漏るでしょうね。小さいのなら使えるかもしれませんが。」

▶村山さん(上)と田沢さん(下)



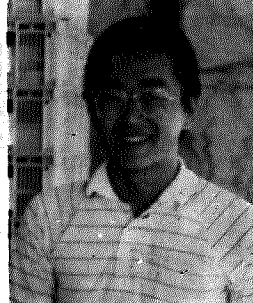
▶沼田さん



▶藤波さん



▶渡辺さん



▶鷲尾さん

